

令和 6 年 9 月 27 日現在

機関番号：31103

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K02944

研究課題名（和文）工学研究活動を行う学生の複言語話者としての熟達とアイデンティティ変容に関する研究

研究課題名（英文）Proficiency development as plurilingual speakers and identity change of engineering graduate students

研究代表者

岩見 一郎（IWAMI, Ichiro）

八戸工業大学・感性デザイン学部・教授

研究者番号：70803675

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の当初の目的は、国際学会で英語研究発表（以下、英語プレゼン）を行う工学研究科の学生の複言語話者としての変容を明らかにすることだった。しかしコロナ禍で対面式国際学会が開催されず、社会的観点から変容を捉えるデータ収集もできず、研究目的は学术交流での英語の使い手としての変容の確認に変更し、指導実践にはオンライン国際学会及び英プレゼン・セミナーでの発表と事前・事後指導、英語プレゼン能力育成のためのオンライン授業、英語圏の大学教員等とのオンライン交流を盛り込んだ。観察及びアンケート調査から、種々の取り組みが学生の英語プレゼン能力、学术交流におけるコミュニケーション能力育成を支えたことが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果の学術的意義は、工学研究と英語教育が交差するESPの指導実践は正規の科目ではなかったが、学生が英語プレゼンテーション能力育成に継続的に取り組み、英語の使い手としての変容が若干見られたことである。事後アンケート調査から、国際学会等での研究発表後の質疑応答の対応の難しさ、語彙力不足等が課題として指摘されているが、指導実践を学生が肯定的に受け止めていることが分かった。社会的意義は、この指導実践を通じた英語教育と異なる次元で展開できたことであり、学生が様々な経験から英語での学术交流で最低限機能できるようになったことは小規模高等教育機関での英語指導実践及び同僚・外部講師等との連携の成果と言える。

研究成果の概要（英文）：This study originally aimed to clarify the proficiency of engineering majors as plurilingual speakers when making presentations at international conferences. However, it encountered a significant challenge with the spread of COVID-19. Face-to-face conferences were cancelled resulting in modifications to this study. The new purpose of the study changed to check the students' proficiency as English speakers in academic interactions. The instructional contents included presentations at online international conferences and seminars, pre-and-post-conference/seminar instructions, online English presentation lessons, and online communications with English-speaking professors and so on. The results of the observations and questionnaires indicated that various practices helped them develop presentation skills and grow as positive communicators in English.

研究分野：英語教育

キーワード：工学研究 英語教育 英語プレゼンテーション ESP 国際学会 言語社会化 アイデンティティ

1. 研究開始当初の背景

八戸工業大学(以下、本学)大学院の人材育成目標の中に、「専門基礎力の充実した人材の育成」が掲げられており、それは1つに「外国文献の読解力と表現力の養成」によって行われることになっている。一般に、本学では、大学院生(以下、院生)も含め、英語に対して苦手意識を持っている者が多い。我が国では、人手不足が深刻化する中、人的資本大国の再生が最重要課題である。Society5.0の実現に際しては、現有ストックを有効に活用し適切に組み合わせることが必要であり、初等中等教育の英語学習ラインで取り残された若者を啓発・支援することが喫緊の課題である。本学基礎教育研究センター英語教室では打開策として、従来の教育課程では学部生向けに習熟度別クラス編成、リメディアル科目開講などを試み、現行の教育課程では開講科目数を増やし学生が自由に選択履修できるようにしてある。その一方で、院生は工学専門分野の英語論文を読み書きしたり、国際学会で英語による研究成果の発表を行ったりしているが、彼らに対する指導は、通常、工学専門教員が行っており、英語教室の組織的な関与はなかった。

工学研究科の院生の英語プレゼンテーション能力育成を支援する指導実践は、筆者が常勤教員として勤務開始した2017年度に始まった。事の始まりは、筆者がネット学内掲示板に工学研究科1年生の国際学会でのポスター発表を伝える記事を見たことだった。そこで本学院生の英語による研究発表に興味を持ち、またその院生が、筆者がかつて勤務していた高校に生徒として在籍していたことに気づき、筆者の研究室に招いて研究活動について訊ねてみた。その際に、翌年には韓国で開催される国際学会で研究発表することになっているという説明を受け、研究成果をまとめた英語論文を添削してほしいと依頼され、そこから英語指導が始まった。初期の指導実践は、全て個別指導であり、学生の状況、与えられた準備時間を考慮して指導方法、指導内容を調整しながら行った。また本学には英語ネイティブの常勤教員が勤務していないこともあり、特別に英語ネイティブ話者との交流機会を設けていた。その後、毎年、学部生を含め数名の学生が英語プレゼンテーション能力育成のための指導実践に参加してきた。この指導実践には2023年度末までに学部生として3名が、院生として延べ29名が参加している。今後、「学生」と記す場合は、これらの学部生ないしは院生を指す。

本研究の対象となったのは、2020年度開始時から2023年度末までの指導実践だが、研究開始当初に研究目的として考えていたのは、(1)工学研究を行う学生たちが英語による研究活動にどのように関わるかを示すとともに、それによって英語を含む複言語話者としての熟達が見られるかどうかを確かめる、(2)工学研究を行う学生たちの英語による研究活動において複言語話者としてのアイデンティティの変容が見られるかどうかを確かめることだった。学生に必要なのは母語である日本語と学習言語である英語、そして学術交流及び海外出張等で遭遇する他言語を自己の中に共存させ、異なる多様な言語体験を相互に関連づけて新たにコミュニケーション能力をつくりだすことであり、これは複言語主義的と考えた。一方、本学には英語ネイティブ教員が常駐しておらず、学生が英語でやりとり機会は極めて少なかった。そこで指導実践として、海外出身者を本学に招聘したり、近隣市に所在する駐留外国軍基地内ある教育施設を訪問したり、ICTで国内外の海外出身者とweb contactを行ったりして、人的リソースとのface-to-face contactを推進しようと考えていた。そして成果として、多様な言語体験を経た学生に複言語話者として、熟達、アイデンティティ変容が見られるかどうかを検証することを考えていた。

2. 研究の目的

2020年度になると、学内では英語プレゼンテーションの指導を希望する学生数が増え、個別指導とともに一斉授業の指導を行うことになった。一方、この頃、新型コロナウイルスが流行し始め、コロナ禍は本研究にも大きな影響を及ぼした。対面式の国際学会が全世界的に開催されなくなるという事態が生じ、学生が海外渡航して開催地で研究発表を行うことも、筆者が同行してその行為を観察し社会的観点から捉えた研究を進めることも不可能になり、当初の研究目的、指導実践内容に軌道修正を余儀なくされた。そうした中で、オンラインで開催される国際学会に参加して研究発表を行う新しい動きが出てきた。そこで、本研究の目的は、英語プレゼンテーションに関する指導実践を軸に据えたオンライン活動を通して、学生たちに英語の使い手としての変容を見出せるか否かに切り替えた。また指導実践では、(1)英語ネイティブ外部講師による英語プレゼンテーション能力育成のためのオンライン授業、(2)オンライン開催の国際学会での研究発表と質疑応答、(3)本学開催の英語プレゼンテーション・ワークショップ(現セミナー)での研究紹介との質疑応答、(4)非英語圏出身の大学教員とのオンラインでの交流と研究紹介、(5)前述の研究発表または研究紹介のための事前指導、(6)英語圏の大学教員等とのメール交流を実施し、観察することとした。

ところで、本研究の独自性は、工学研究と英語教育が交差している領域において学生に着目して、彼らの国際コミュニケーションの実態を質的研究の対象としている点である。理工系研究活動を行う学生への指導実践を取り上げた先行事例はあるが、学生の実態に関する質的研究はそれほど多いわけでない。本研究でも質的研究を行うこととして、指導実践の成果は、レイブとウエンガーの「正統的周辺参加」論を援用し、学生が国際学会への新参加者として初期段階で実践共同体に「周辺の参加」するかどうか、その後の段階で中心的なところへ「十全参加」していくプロセスを経るかどうか、また国際学会で他の参加者と十全な関わり方ができるようになるかどうかに焦点を当てることにした。

3. 研究の方法

3.1 英語プレゼンテーション能力育成の取り組み

指導実践のうち、一斉授業では、筆者が単独で指導するとともに、英語ネイティブ外部講師によるオンラインでの指導を導入した。これとは別に、個別指導も行うことにしたが、前の年度に一斉授業を受講しさらに指導を希望するという学生を対象に週一回定期的に行う場合と、一斉指導の受講者の中でオンラインの国際学会で研究発表を行なうことになっている者に対して、その事前練習として、短い期間に集中的に行う場合があった。また、将来の国際学会での研究発表を想定して、自らの意思で英語力向上のための特別指導を希望して、個別指導を行う場合もあった。

指導内容については、一斉授業の中で筆者が担当する部分は、アカデミック・プレゼンテーションに関する参考資料に基づき組み立てた。なお筆者は、自身の日本語と英語を使った授業用に自主教材を事前に作成し、学生にメール配信し、予習に利用させてきた。参考資料には英文記述が多く含まれており、学生には英語プレゼンテーションに関係する分野での英語読解力が必要となった。筆者は、学生間に英語読解力に差があることを想定して、内容重視型授業(Content-Based Instruction)の中のシェルターモデルの指導法(宮迫, 2016)を導入してきた。シェルターモデルでは、内容科目教師がL2(第二言語)学習者に対して、L2で教えるのが基本であり、科目内容の学習が一義的であり、L2学習者の言語能力に対応しながら授業が行われる。英語プレゼンテーションというジャンルについて、工学専門の学生たちにとっては内容面で新規に学ばなければならない部分も多く、さらに英語という壁もあり、ある程度日本語による補足が必要と判断されたので、部分的な和訳は事前学修用の教材には含めることにした。また英語ネイティブ講師による一斉指導は、英語教育専門機関に委託し、授業担当者間で指導内容を事前に協議した上で、オンライン指導を行ってきた。

これまで、一斉授業の指導と、必要に応じて個別指導を、並行して行ってきた。また2021年度からは、学内で英語プレゼンテーション・セミナー(旧ワークショップ)を開催し、英語ネイティブ講師による講演と学生による英語での研究紹介を実施している。学生には発表後の質疑応答で質問の内容が理解できない場合があることを想定して、事前練習で聞き返しの表現を指導してきた。また学生にとっては、質問を受けてその内容を理解した上で、英語で即答するのが至難の業であるため、事前に質問を想定させ、それに対する回答も準備させ、本番で関連することが質問されたら、談話を自らの土俵に引き寄せて、その中で相手の求めている情報を提供するように指導してきた。さらに、学生が制限時間内に対応できないと判断した場合は、メールで後日対応するように指導してきた。加えて2023年度実施の同セミナーへは、本学教職員の参加を促し、近隣の公立・私立高校英語教員及び外国語指導助手にも開催案内を送付して参加を呼びかけた。開催当日は約40名が参加し、工学系英語教育という観点での高大連携の機会となった。

3.2 取り組みの成果

指導実践の成果は、一斉授業におけるコミュニケーション活動での取り組み、英語プレゼンテーションの練習、英語ネイティブ話者とのやりとり、国際学会及び英語プレゼンテーション・セミナーでの発表と質疑応答でのやりとり等における、学生の英語の使い手としての変容に注目して判断してきた。国際学会等での取り組みについては、コロナ禍以前に海外で発表する場合は学生にビデオ収録させて、帰国後に視聴した。コロナ禍で国際学会がオンライン開催となってからは、学生は学内に留まってオンライン発表するため、筆者が直接観察したり、ビデオ収録したものを後日視聴したりしてきた。また、一斉授業、国際学会等での発表の後で、事後アンケートを実施し、学生の自己評価を、成果に関する判断の根拠としている。

3.2.1 英語プレゼンテーション能力育成の取り組み

宮迫(2019)は、専門知識(expertise)及び卓越したパフォーマンスにおいて、優秀な専門家・達人の育成に必要なとされる計画的練習の英語教育への応用の可能性を探っている。すなわち、計画的練習の原則に基づき、集中、フィードバック、修正という3条件を満たす準計画的練習が、英語の達人の学習法に存在するか、存在する場合はどのような内容かに関して、英語の達人(n=18)の学習方略に関する資料(竹内, 2003)で調査を行った。その結果、達人の学習において、以下の3点が明らかになっている。(a)準計画的練習が相当な割合で行われている可能性がある。(b)目的活動に直接係る下位部門スキル練習が大部分を占める。(c)第二言語習得研究の知見に沿うものが見られる。ここで、一斉授業を受けた学生からの授業についてのコメントを紹介する。2022年度後期最後のオンライン一斉授業では、3名の学生に一人8分から10分程度の英語プレゼンテーションを行わせた。発表を終えての感想は、「自分が思っていたよりもスムーズに話せていたと感じたが原稿に頼っていたためその部分で改善が必要だと考えた。将来的には原稿を見ないでプレゼンテーションしたいと考えてはいるが、文をただ暗記した話し方よりもある程度その場に応じた話し方ができたらいいと感じる」、「この授業は、大学の中で最も大変で、最も役に立っている。この授業に参加できてとても嬉しい」、「時々、発表中に詰まってしまうことがあったことと正しい発音で発表することができなかったことが反省点である」と綴っている。

指導・支援で役に立ったと思われる点は、「プレゼンテーションのテンプレート、プレゼンテ

ーションの構成とその話し方」,「発表での質疑応答の仕方,発表の心構え,パワーポイントの作り方」,「同じ表現や言葉を言い回さないような言い換え表現は,英語プレゼンテーションだけでなく,日本語でのプレゼンテーションでも役に立つものだと感じた」と述べているが,ここから計画的な事前練習,下位部門スキル練習が不可欠ことが分かる。

また,国際学会で英語プレゼンテーションを行う研究者として自分を見つめた場合,英語への向き合い方,英語プレゼンテーションの取り組み,自分の変化・変容については,「勉強量が多くなったことで取り組む姿勢が変わった。YouTube で見ている留学生の英会話についていけるようになってきた」,「英語プレゼンテーションにおいて重要な listening と speaking の能力が上がったと感じる。しかしまだまだ力不足であるため,場数を踏んで成長していきたい」,「英語でプレゼンする上で,高校まで学習したことが主に大切になってくると実感している。自分は英語が得意ではないため,10月あたりから高校の英語の勉強に取り組んでいる」と自己の振り返りと今後の展望について述べている。

さらに学生たちからは,パワーポイントの作成方法に関する指導の要望,日常的な英会話学習の強化,毎回の授業での short speech の実践,初めて発表を聞いた人にも分りやすく伝えられるようなスクリプト作りの指導,パワーポイントのスライドの表現を簡単にすることの指導,対話的な授業実践の要望が出されており,その後の授業作りの参考になった。

学生は,上述の取り組みを継続することによって,期待される好ましい変容が得られることが明らかになった。英語プレゼンテーションにおける若干の変容については,観察及び事後アンケートのコメントから窺い知ることができる。

一方,質疑応答の練習は限界があり,さらなる指導上の工夫が必要である。ある学生は学内で開催された英語プレゼンテーション・ワークショップでの研究紹介後の質疑応答で,フロアからの質問の英語を理解できなかったが,後日メールでやりとりして質問に回答している。事後アンケートでは,「何度も練習を重ねた為,スムーズに終わることができたと思う」,「質疑応答に関しては,英語の勉強不足もあり自分の考えや意見をうまく伝えられず,その場凌ぎの回答になってしまった」,「普段日常では,使わない英語を真剣になって勉強し,プレゼンに取り組めたことはとても良い機会になった」と,不足部分はあるものの自らの変容を自覚し,指導実践を肯定的に受け止めている。

さらに,2022年度に英語プレゼンテーション・ワークショップ(現セミナー)で学生のパフォーマンスを視聴した本学英語ネイティブ非常勤講師は以下のようにコメントしている。"I was greatly impressed by all of the student presenters. They all made fairly technical subject matter comprehensible to anyone without specialized knowledge of the subject. As well as the content of their presentations, the students should be praised for their excellent delivery in English. Giving a presentation in a foreign language is a huge challenge for anyone and each student succeeded in this challenge. The biggest difficulty the students seemed to have was in understanding and answering questions about their presentations. Given more practice I believe they could largely overcome this problem." 質疑応答部分での質問の理解と回答に課題は残っているものの,学生の英語プレゼンテーションについては一定の評価を得ることができた。

巨理(2021)は対話実践的外国語教育について次のように指摘している「すべてのコミュニケーション(活動)がうまくいくわけではなく,偶発的展開にうまく対応できず,不首尾に終わることもあるはず。むしろその「失敗」を体験できることこそが重要だと言えます。「誤りなく,成功しにくい,予定調和的コミュニケーション」から離れられたときにはじめて,学校教育の一環としての外国語教育は,もっと言えば授業におけるコミュニケーションは,それに必要な能力の探究を次の段階へと進められるでしょう」(p.195)。学内での指導実践にしる,国際学会での発表,質疑応答にしる,予定調和的なコミュニケーションにはならないことも多々ある。それらの経験から何を学び,今後はどう生かしていくか,そこに真価が問われる。2022年度に英語プレゼンテーションに取り組んだ学生は,「英語の発表に関しては,何度も練習を重ねていた為,スムーズに終わることができたと思います。質疑応答に関しては,英語の勉強不足もあり自分の考えや意見をうまく伝えられず,その場凌ぎの回答になってしまいました」,「発表者の心構えやパワーポイント作成の工夫の手立てなどの指導をしていただけたことで,英語プレゼンの発表をスムーズに行えました」,「普段日常では,使わない英語を真剣になって勉強し,プレゼンに取り組めたことはとても良い機会になりました」とコメントしている。質疑応答部分での質問の理解と回答に課題は残っているものの,学生の英語プレゼンテーションについては一定の評価を得ることができた。

学生たちは,このような活動において,英語を使う中で躓きながらも,コミュニケーションを行う他者との人間関係構築の重要性を感じている。専門教育の指導と高年次英語教育の指導を通して,国際学会に向かう若手の工学研究者として,着実に成長していくものと期待される。

3.2.2 英語教育実践者としての取り組み

ここでは英語教育実践者としての筆者自らの取り組みを振り返り,その成果を考察する。一連の指導実践は,本学の英語教育の在り方を見直すきっかけとなり,工学系大学の英語教員としての筆者の意識の変容に繋がっている。英語教員として筆者がこの指導実践に取り組んできた最大のメリットは何だったか。それはこの指導経験が小中高で進められているコミュニケーシ

ン重視の学校英語教育の枠組みに収まっておらず、また the “teach to the test” mentality (Japan Times Editorial, March 31, 2013), つまりテスト中心主義の英語教育から脱却していた点である。英語の使い手としての学生の成長は、対覇権主義的視点、民俗学的な視点(島村, 2019) から見つめるようにしている。

筆者の変容は、英語教員として「守備範囲」に関する意識の変化から自覚した。最初の指導目標は、学生が一通り英語で口頭発表できるようになることだったが、その後質疑応答に対応できるようになること、躰きを修正できるようになること、国際学会参加者として適切に振舞えるようになることと膨らんでいった。その間に、筆者は、英語プレゼンテーションについての先行研究に触れ、関連書籍を読み、委託契約を結んだ英語ネイティブ講師との協議を通して、必要と思われる指導項目を追加的に指導実践に取り込んできた。そして学生の観察から、自らの指導実践の内容も微調整しながら、変化させてきたのである。

一方、筆者にとって障壁だったのが、専門外の工学研究の研究発表の支援をしなければならないことだった。山中(2019)は教員論の観点から英語教育内に備わっている脆弱性について、「研究者としての専門分野、専門性を発揮できる教員論の観点から英語教育内に備わっている脆弱性について、「専門分野、専門性を発揮できるのはせいぜい人文/社会科学系統の学部のみであり、それ以外の学部における教学の内容に、実は英語教員自身がほぼ対応できていない」(p.86)と指摘している。この脆弱性は、工学研究との接点が全くなかった筆者が直面した障壁と重なった。本論で報告しているこの指導実践は、通常の学校英語教育とは異なる、重森ら(2010)が言うところの「越境型」の取り組みに類似していると考えられる。必ずしも恵まれた条件とは言えない中で、この指導実践を持続できた背景には、同僚性を基盤とする本学教職員及び学外協力者との連携、学生たちの前向きに取り組む姿勢があったことが大きい。

3.3 今後の課題

本学での学際的支援プログラムの取り組みは、工学研究科の学生の英語力向上を念頭に置いて行っている教育活動であるが、大学院教育カリキュラムに組み込まれているものではない。したがって単位取得とは直結しておらず、その位置付けをどうするかが今後の課題である。またこの取り組みをさらに充実させるためには英語教室及び工学研究科教員及び国際交流センター教職員の理解と協力がますます必要になる。本学の高年次英語教育は、専攻領域を越えた指導となっており、3つの専攻分野(機械・生物化学工学専攻、電子電気・情報工学専攻及び社会基盤工学専攻)に共通した取り組みである。英語教員が、学生の専門分野の内容にまで介入したことはこれまでなかったが、専門分野での英語力を向上させるのであれば、この種の取り組みは必要不可欠である。英語教員としての課題は、これまで守ってきた「聖域」意識をいかに取り除いていくかである。国際化とグローバル化が凄まじい勢いで進行する中、インターネットで大量の英語情報が国境を越えて乱入している状況において、どのような意識を持って、英語教育、特に工学研究に取り組む学生を対象とした高年次英語教育に向き合っていくのか、真剣な考察と積極的な実践が必要になる。

3.4 まとめ

高祖(2017)は、我が国の学術レベルが様々な分野でトップ水準にある一方で、「国際的学術情報発信力」については高いと言えないと報告している。このことと関連して、保田(2021)は、その背景にある理由の1つとして、その発信の際に用いる「英語」が我が国の研究者の多くにとって「外国語」であるにもかかわらず多くの高等教育機関では、大学院生や若手研究者といった学習者層に対する高年次英語教育が提供されていないと指摘している。本学の高次英語教育改善を推進する際には、指導内容、指導体制、人員配置等に関して、十分な検討が必要である。この取り組みが、今後学内の同僚間で共有され、さらなる進化・発展へと繋がること、本学院生の国際学会での研究発表が広く国際社会の発展に寄与できるようになることを期待したい。

参考文献

- 高祖 歩美：日英米の比較からみる研究成果，国際情報発信，情報管理，60，6，pp.420-428，2017。
重森 臣広，宮浦 崇，田林 葉，飯田 未希，西田 崇：英語教育における「開放性」- 学部の専門性にもとづく脱自己完結型英語教育の考察 -，立命館高等教育研究第10号，pp.79-95，2010。
島村 恭則：民俗学とはいかなる学問か，日常と文化，7，pp.1-14，2019。
竹内 理：より良い外国語学習法を求めて 外国語学習成功者の研究，松柏社，2003。
山中 司：大学にもう英語教育はいらない - 自身の「否定」と「乗り越え」が求められる英語教育者へのささやかなる警鐘 -，立命館人間科学研究第38号，pp.73-89，2019。
宮迫 靖静：内容重視型言語教育に対する教職志望の大学生の認識 - 英語科教育法に焦点を当てて -，日本教科教育学会誌第39巻第1号，pp.11-20，2016。
宮迫 靖静：英語の達人はどのように練習したのか - 専門知識及び卓越したパフォーマンス研究の視点から -，福岡教育大学紀要第68巻第1分冊，pp.1-11，2019。
保田 幸子：科学論文における主観性：アカデミック・ディスコース概念の再考，日本教育工学論文誌，45，1，pp.1-13，2021。
巨理 陽一：外国語コミュニケーション，石井 英真(編)，流行に踊る日本の教育，東洋館出版社，2021。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 岩見一郎	4. 巻 43
2. 論文標題 工学系大学における高年次英語教育改善に向けた取り組みについて	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 八戸工業大学紀要	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32127/0002000049	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 岩見一郎	4. 巻 42
2. 論文標題 工学系大学における英語プレゼンテーション能力育成のための指導実践の成果に関する考察：英語教員の自己省察に基づいて	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 八戸工業大学紀要	6. 最初と最後の頁 137-156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32127/0000004121	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 岩見一郎	4. 巻 41
2. 論文標題 工学系大学における英語プレゼンテーション能力育成のための指導実践：取り組みの成果と課題	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 八戸工業大学紀要	6. 最初と最後の頁 142-150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32127/00004033	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 岩見一郎	4. 巻 40
2. 論文標題 工学系大学で英語プレゼンテーション能力育成に取り組む学生の変容に関する一考察：第二言語習得研究の社会的視点から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 八戸工業大学紀要	6. 最初と最後の頁 235-242
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32127/00004004	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岩見一郎	4. 巻 39
2. 論文標題 工学系大学における英語プレゼンテーション能力開発のための一試案	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 八戸工業大学紀要	6. 最初と最後の頁 238-247
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32127/00003967	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 岩見一郎
2. 発表標題 工学系大学における英語プレゼンテーション能力育成のための指導実践報告
3. 学会等名 全国英語教育学会第48回香川研究大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	高瀬 慎介 (TAKASE Shinsuke) (00748808)	八戸工業大学・大学院工学研究科・教授 (31103)	
研究分担者	橋詰 豊 (HASHIDUME Yutaka) (60803236)	八戸工業大学・大学院工学研究科・准教授 (31103)	2022年3月28日削除

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計3件

国際研究集会 第1回英語プレゼンテーション・ワークショップ	開催年 2022年~2022年
----------------------------------	--------------------

国際研究集会 第2回英語プレゼンテーション・ワークショップ	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 第3回英語プレゼンテーション・セミナー	開催年 2024年～2024年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------